



～お葬儀屋さんのひとりごと～

■お盆のいわれと由来■

お盆の正式名称は「盂蘭盆会・うらぼんえ」と言います。先祖の精霊を迎え追善の供養をする期間を「お盆」と呼びます。7月または8月の13日より16日までの4日間をさします。13日の夕方に迎え火を焚き先祖の霊を迎え、16日の夕方、送り火を焚き、御先祖さまにお帰りいただきます。期間中には僧侶を招きお経や飲食の供養をします。

■日本のお盆■

「盂蘭盆会・うらぼんえ」とはインドのサンスクリット語のウランバナ（逆さ吊り）を漢字で音写したもので、転じて「逆さまに釣り下げられるような苦しみにあっている人を救う法要」という意味です。

お盆の行事はお釈迦さまの弟子の一人、目連尊者（もくれんそんじゃ）が母を救う話に由来しています。目連尊者はある時神通力によって亡き母が餓鬼道に落ち逆さ吊りにされて苦しんでいると知りました。そこで、どうしたら母親を救えるのかお釈迦様に相談したところ、お釈迦様は言われました。「夏の修行が終った7月15日に僧侶を招き、多くの供物をささげて供養すれば母を救うことが出来るであろう」と。目連尊者がお釈迦様の教えのままにしたところ、その功德によって母親は極楽往生がとげられたとのことです。それ以来（旧暦）7月15日は、父母や先祖に報恩感謝をささげ、供養をつむ重要な日となりました。

わが国では、推古天皇の14年（606）に、はじめてお盆の行事が行われたと伝えられています。江戸時代以前のお盆行事は武家、貴族、僧侶、宮廷の上層階級で主に催され、一般庶民に広まったのは江戸時代ようです。

日本各地で行われるお盆の行事は、各地の風習などが加わったり、宗派による違いなどによってさまざまで、これが絶対に正しいという決まりはありません。一般的に先祖の霊が帰ってくると考えられています。

◆盆と正月・・・・・・・・藪入り（やぶいり）

「盆と正月」という言葉が聞かれるほど、日本人にとってお盆は大切な行事と考えられています。江戸の時代、お正月とお盆には奉公人が休みをとって実家に帰ることが出来る時期で、これを「藪入り」と称しました。

当時は、仕事を見習うために、職人・商人ともに、十三・四歳頃から師匠や商家を選んで丁稚奉公にでたものです。丁稚たちは例年、正月の藪入りに主人から衣類万端与えられ、小遣いをもらって親許へ帰ります。

この時期はまた、他家に嫁いだ女性が実家に戻ることの出来る時期でもあり、自分と自分の家（先祖、ルーツ・・・）の繋がりを確認する大切な行事でありました。

「お盆」は、仏教の盂蘭盆（ウランバナ）が藪入り（やぶいり）に結びついて、現代に伝えられたものです。

■お盆の意義■

お盆（盂蘭盆会）は、先祖や亡くなった人たちが苦しむことなく、成仏してくれるようにと、私たち子孫が、報恩の供養をする時なのです。

お墓参りになかなか行けない人も、日頃のお礼の気持ちを先祖様に伝えるいい機会です。地方によってその日程、盆棚の飾付け方などは多少異なりますが、その心は同じはず。家の事情によってお仏壇を置いていない家庭も多いようですが、お盆の間だけでも先祖への気持ちを大切に、簡単なお飾りだけでも作りませんか？

